

## 戦後歴史学の明暗

—— 渡部徹と社会・労働運動史研究 ——

福 家 崇 洋\*

### はじめに

本稿は、戦後の日本で労働運動、社会運動、部落解放運動の研究を牽引した渡部徹の軌跡とその学問に焦点をあてる。強靱な実証でまとめあげられた研究は、半世紀以上たった現在でも、多くの学問的知見を後進に与えてくれる。

渡部の学問は、長く勤務した京都大学人文科学研究所と密接に関連している。人文研では、個人研究を進めながら、共同研究班を運営して論文集を刊行することが重要な業務となる。彼が単著より編著を多く刊行したのも、共同研究班の成果が一定数を占めるためである。具体的には、井上清と『米騒動の研究』（1959-62年）や『大正期の急進的自由主義 『東洋経済新報』を中心として』（1972年）を、飛鳥井雅道と『日本社会主義運動史論』（1973年）を編集・刊行した。

この研究班と同時並行で渡部が進めたのがアーカイブ事業である。近代日本の社会・労働運動の研究者が限られていた時代に、関連する諸資料をいかに収集して次世代へ継続するのかを、渡部は意識的に考えて実践した。人文研の図書室に入ると、彼の研究班で活用されたと思われる、社会運動史資料の写しを貼り付けたスクラップ帖や紙焼き資料に出くわす。

今日から渡部を振り返るさいに見逃すことができないのが日本共産党の存在である。彼が研究活動をおこなった時期は、我々の想像以上に政治や社会運動が学問へ影響を及ぼしていた。戦前から「左翼」学生運動に関わり、戦後に非主流の日本共産党員だった渡部の軌跡と学問には、さまざまな抑圧が加わった。そうした環境下で一次資料に基づく実証主義という研究方法が戦略的に選ばれたのだった。それゆえに、時代状況を踏まえずに、渡部の学問のもつ意義や背景を十分に理解することはできない。

---

\* ふけ たかひろ 京都大学人文科学研究所

渡部徹の歴史学については、黒川伊織氏による先行研究<sup>1)</sup>があり、扱う時期も対象もほぼ同じとなる本稿も多くの点をおうた。本稿では新たにみつかった諸資料を用いながら、渡部の軌跡と学問をより詳細に追うこととしたい。ひとつは渡部徹関係資料、もうひとつは本小特集とも関わる京都勤労者学園所蔵京都人文学園関係資料である。後者は、渡部と京都人文学園の関係をおさえるうえで不可欠な資料である。



写真 京都勤労学校第2回入学式（1958年）で壇上に立つ渡部徹

前者は、渡部徹の共同研究班に参加した田中真人氏（同志社大学人文科学研究所教授）の旧蔵で、それを筆者が預かったものである。田中は、渡部の没後に開催された「渡部徹先生を偲ぶ会」の事務局をつとめたひとりであった。そうした縁に鑑みると、渡部の生前か没後に彼の関連資料を預かったと推測される。資料群の内容は、渡部徹自身が著作物の写しや原稿を貼り付けたスクラップ帳、生前の渡部が所持していた同時代の政治・社会運動関係資料などである。渡部の直筆原稿や若き日の彼が発表した文章は今日では入手が難しい。それらの原稿から渡部の新たな側面を伺うことができる。同じく渡部旧蔵の同時代の政治・社会運動関係資料は彼の活動の周辺をみるうえで有用である。

本稿では、特集との関連もあり、主として彼が京都帝国大学に入る前後となる1930年代から、『京都地方労働運動史』を編集・刊行する1960年頃までの時期に焦点をあてることにしたい。それゆえ、彼の部落問題研究は本稿では扱わない。彼の軌跡と学問をたどるうえで、次のとおり、時期区分を設けた。第1章は京都帝国大学在学から敗戦までとし、第2章以降は日本共産党の動向に依る。1950年のコミンフォルム批判までを第2章、コミンフォルム批判から1955年の第6回全国協議会（六全協）までを第3章、六全協から1960年頃までを第4章とする。以上の各時期において、渡部がいかに学問と社会に向き合ったのかを振り返ってみたい。

## 1 戦前期の京大学生運動との関わり

渡部徹は1918年3月5日に大阪府に生まれた。1924年4月に大阪府池田師範学校附属尋常小学校に入学し、続いて1930年4月に大阪府立豊中中学校に入学した。ここを卒業し、1935年4月に岡山の第六高等学校文科乙類入学をへて、1939年4月に京都帝国大学経済学部に入學した。

渡部にとって六高入脈は重要である。1年先輩にあたるのが藤田二郎や吉村達次、生島国雄である。3人は京都一中から六高へ進学した同窓である<sup>2)</sup>。六高時代について、渡部は「高等学校時代は運動めいたことは全く無縁で、むしろ文学青年であった。ただ、すでに京大法学部に進学していた先輩生島国雄（遼一の末弟）の指導で、日本資本主義論争関係の本を少しかじってはいた」と回想する<sup>3)</sup>。入学後は、藤田が室長だった寄宿舎に入った<sup>4)</sup>。

藤田と吉村は、1937年に京都帝国大学経済学部に進み、藤田は蜷川虎三ゼミに、吉村は石川興二ゼミに所属した<sup>5)</sup>。生島は同年、京大法学部に進学する。彼らのあとを追う形で、渡部も京大経済学部に入學し、再び先輩後輩の間柄となった。渡部は、藤田をめぐる回想で、「私が京大受験の時、西陣のお宅に泊めてもらったのを最初に、大学時代、戦後直後、しばしばお宅を訪ね、泊めてもらい、御両親・奥様にも大変お世話になった」<sup>6)</sup>と述べている。ゆえに大学時代も付き合いがあったものと思われる。

吉村との接点に視点を移すと、京大学生運動の存在がある。滝川事件以後も学生運動は細々と存続し、その代表的な組織のひとつが「京大ケルン」である（1938年初めにこの名称となる）。当時の官憲は、同組織を「京大内の各種学生運動を共産主義的立場より指導する中心組織にして、学生大衆の共産主義化を目的とすると共に、学外の共産主義運動並に全国的学生運動との連絡の単位として活動すべき任務を有する非法法組織」と捉えていた<sup>7)</sup>。同組織には「民主的中央部」があったとされ、その中に「学友会中立代議員」として佐々木時雄の名前がある<sup>8)</sup>。敗戦後に京都人文学園の主事となる佐々木は、浪速高校時代から学生運動に関わり検束された来歴を持ち<sup>9)</sup>、1934年の京大経済学部入学後<sup>10)</sup>も同様の活動に取り組んでいた。

「京大ケルン」は結成まもなく当局に弾圧された。その再建及び同志獲得運動に吉村が加わった。1939年11月頃になると、農学部の永田和生らがこの運動を主導した<sup>11)</sup>。この時、彼らが採用した方法が読書会の開催である。

渡部は1回生の夏休み明けの9月、避暑地の信州から京都に戻ってきたところ、吉村から『資本論』を読もうと誘われた。そして、六高から一緒に入学してきた友人数人とともに、吉村をチューターとする読書会に参加するようになった<sup>12)</sup>。ここから、渡部は石川興二を指導教官とする学内研究会「国民経済研究会」にも参加した。こうした活動が永田の目にとまり、渡部は積極的にオルグされ、運動に関わりはじめた。学友会体育委員会の委員になって政治対立に巻き込まれたり、別の学内研究会である経済研究会の乗っ取りを指示されたり、国民経済研究会が解散すると、その指導教官だった谷口吉彦に新たに新体制総合研究会を設けるよう仕向けられたりした。この時期には新体制にあわせて学友会の改組も試みられ、永田や渡部もここに加わった。時代状況の限界はありつつも、「学友会の民主的伝統を評価、維持したい、下からの自発性・自主性が失われてはならない」<sup>13)</sup>と渡部は考えたが成功せず、同学会という新組織が誕生した。

永田、吉村、渡部らの活動は官憲の目に届きはじめ、「京大内非合法研究グループ」として、1941年1月に検挙された。約20名が検挙され、渡部は中立売警察署に連行され、95日間留置場で過ごす。5月から翌月にかけて、起訴猶予組と起訴組に分けられ、渡部は前者に、永田、吉村は後者に入った。渡部は1941年4月に起訴猶予で釈放されたが、大学当局から7月30日までの停学処分を言い渡された。留年の心づもりだったが、3ヶ月の繰り上げ卒業と徴兵猶予の短縮が実施されたため、卒業せざるをえなくなった。まさに「対英米戦争」勃発の12月に試験を受けて無事に単位を取得、学内の臨時徴兵検査で甲種合格と判定されて翌年2月1日入営の運びとなった。ところが、大学の規定で停学・休学になるとその分だけ卒業期日が延ばされることとなり、実際の入営は10月1日であった。その間、「父の関係の横浜の商社」に9月末まで勤務した。この商社とは、貿易商の野崎産業株式会社横浜本店である。渡部の履歴によると、1942年2月から勤務している。

渡部は、勤務時間のあいまをぬって経済学の勉強を継続した。彼のスクラップ帳には、未発表の直筆原稿「工場立法の必然性 資本論による解明」が残る<sup>14)</sup>。タイプ打ち原稿作成の段階で、タイトルは「標準労働日ノ制定ヲメグル理論的問題」に変更された。前者は1942年「6月?」、後者は同年「8月?」と整理後に時期が記載されている。渡部のメモ書きによれば、松井清（京都帝国大学経済学部講師）と大河内一男（東京帝国大学経済学部教授）ほか1名に郵送したとある<sup>15)</sup>。内容は、工場立法の成立過程に関するもので、ローザ・ルクセンブルク、大河内一男、風早八十二と彼らに對置させたマルクスの見解をそれぞれ紹介した。前三者の説が「工場立法成立の必然性の根拠を資本の経済的必然性に求むる点に共通点を有する」のに対し、渡部は『資本論』を多用しながら、「標準労働日＝工場立法の確立はまさしく階級闘争の産物」「労働日の制限を実現し得たのは資本により死滅と奴隷状態に投げ込まれた労働者階級自身の力であつた」と主張する。検挙後も、問題意識を変じていない渡部の姿を本稿から確認できる。

渡部は、10月には予定通り兵役に就き、歩兵第8連隊に入営し、歩兵砲中隊に編入された。彼の軍隊生活については後年の回想に詳しい。ゆえにここでは京大の先輩である野間宏と出会って交流したことを記しておこう<sup>16)</sup>。1945年9月までの約3年間の兵役生活で、彼にとって幸いだったのは「内地」勤務ばかりだったことである。最後は敵前上陸に備えて茨城で敗戦を迎え、大阪に戻って除隊となった。

敗戦前後の渡部の心情は、残されていた「哲学ノートⅡ」に綴られている。いわゆる「玉音放送」を、以下のように受け止めた。「8月15日12時を以て戦ひは終つた。私はこの報を聞いたときそんなに突拍子もないことを聞いた様な気がしてなかった、あたりまへに受けとれた。私は夙にこの日の来ることを予期し又当然我国の行くべき道はこうした結果に終らなければならぬことを確認してゐたのだから、少くとも私はむしろ明るい気持ちで、よく国民を戦争の惨禍から遅まきながらも救つてくれた英断に感謝したい。」<sup>17)</sup> 敗戦を予想し、「内地」勤務ゆえに悲

壮な感じはなく、天皇の「英断」に感謝した。

これ以上に、渡部が情感を込めて書いたのが除隊の日である。「1945年9月13日 まことにこの日こそ忘れてはならない 私にとって桎梏と束縛の生活から解放された解放記念日なのだ。自由と人権を私は再び持つことが出来たのだ。軍隊の臭を凡て拭き去って清新澆刺たる気分て自由と人権を享受するに恥じない生活を始め様。」<sup>18)</sup> 日記によれば、13日に除隊し、実家に帰省し、翌日3年間そのままだった部屋の整理をした。

しかし、落ち着くまもなく、18日には「10月上旬より横浜へ行く様にとの父の話」<sup>19)</sup>があった。すなわち、野崎産業に戻ることを指す。渡部は「竹田その他の旧友と事を謀る上に於て極めて好都合」と思いつつも、連合軍相手の仕事に関心が持てなかった。くわえて「政治的な分野へ進出したい野望もあり」<sup>20)</sup>と記す。結局、彼は元の職場に復帰するが、新聞をみたり専務と話したりするくらいが仕事だった。翌11月になると、彼のなかでやはりここは自分の居場所ではないという気持ちが高まっていく。11月23日の日記には、「実の処私は今のまゝ、会社に居ることに非常な嫌気がさしてゐます。今后、私は文部省の西崎氏が大学の堀江教授に運動して高等学校の教職を得たいと考へてゐます。私はどうしても社会科学を見捨てるわけには行きません。事態の変化した今日若い人達を導くことが私としては今の処一番よりよく貢献しうるのではないかと思ひます。」<sup>21)</sup> こうして、渡部は12月に会社を辞した。

## 2 敗戦後から六全協までの研究活動

退社後の渡部の足取りは不明な点が多い。先述した「政治的分野」への進出と若い人々への教育に関与したと思われる。実際、この時期について渡部は以下のように回想する。

治維法〔治安維持法〕の撤廃・共産主義者の解放・共産党の再建、いよいよ自分たちの時代が来たと胸をふくらませた。革命運動に関係する部署につかねばならぬと、友人を通じて共産党に接触すべく、またその指示のもとに働くべきだとひそかに画策した。

しかし、得体の知れぬこんなヒヨコに部署があるはずもなかった。だが何かしなければと気は焦った。そこでさしあたり何をすることのないまま、戦争中から気になっていたこと——それは、私たちが至らなかったため、後継者を育てられず、京大の学生運動を私たちのところで断絶させたという責任を償わねばならないということ——に着手した。学生運動の先輩を訪ね、また学生に接触を求めため、三食の弁当をもって、大阪から京都へしばしば通った。そして何回かの準備ののち、若干の学生と、学生運動再建を相談する集会をもつことができるようになった。<sup>22)</sup>

敗戦後、大阪に戻った渡部と日本共産党の接触がはじまっていることが確認できる。活動を再開した渡部にとって、学生運動の伝統の継承と再興が目下の課題であった。「学生運動の先輩」のうち、渡部を京大でオルグした永田和生は同じく陸軍に召集され、1944年7月にインパールで戦病死していた<sup>23)</sup>。六高・京大の先輩の吉村達次は、1942年9月卒業と同時に兵役に就き、翌年ラバウルに向かい、敗戦とともに捕虜となり、1946年5月に復員してきた<sup>24)</sup>。

渡部は1946年3月に京大の大学院に入学した。こうして、戦前の運動経験者が集うことで、学生運動を継承する素地ができあがっていった。渡部は、先の引用の続きで、「私たちは、学生はまず学内で結集すべきだと説き、その第一着手として研究会を組織することを勧めた。四六年の新学年を迎える頃には、社会科学研究会・唯物論研究会が発足し、活動的な学生がそこに集まり始めた<sup>25)</sup>」と語る。

渡部の大学院在籍は1949年4月までの約3年間に及ぶ。そしてこれまでの鬱屈を晴らすように、数多くの原稿を発表する。未発表ながら、戦後初の論考のタイトルは「生産管理と経営参加」である。原稿に付されたメモによれば未発表の原因は下記のとおりだった。「この原稿は一九四六年七月？小山弘健の指示により、社会経済労働研究所機関誌『社会経済労働研究』に掲載するため作成したが、同誌の発行が遅れ、時期を失したので未発表に終わった。<sup>26)</sup> 小山は戦前からマルクス主義運動に関わりつつ、軍事技術史などの研究を進め、敗戦後は日本共産党の理論活動に参加、自身も1946年1月に大阪で社会経済労働研究所を立ち上げていた<sup>27)</sup>。渡部と小山の接触は、共産党の活動か、小山も関わっていた大阪の民主主義科学者協会を通してかであると思われる<sup>28)</sup>。同年11月、渡部は『大阪タイムス』に勤務していた梯明秀の勧めで同紙に小論を書いた。その肩書きには「大阪社会経済労働研究所々員」とある<sup>29)</sup>。このように、ときに渡部の単名で、ときに小山ら所員と連名で、論壇誌などに原稿を発表し、資本主義や国家論の論争に積極的に参加した。

同時に、社会経済労働研究所の人びとは著書の刊行にも取り組んだ。渡部がとくに関与したものが『近代日本労働者運動史』（白林社、1947年）である。同書の説明によれば、最初渡部が全篇を書き下し、これを全体にわたって小山が監修した。渡部は、過去1年間の研究と討議の結果に基づいて1946年末から47年春にかけて全草稿を完成させた。実際、「全体の配合・叙述の展開・資料の取舍等々すべてその創意に依る」とある。この渡部の草稿に対してさらに「徹底的な討議」と修正が加えられ、序論・結論は根本的に書き改めて成稿となった<sup>30)</sup>。

同書の内容は近代から敗戦後までの労働運動の通史である。「全く未開拓の領域に最初の鉤をうちおろした」ものであり<sup>31)</sup>、戦後の同分野の研究をリードしようとした彼らの意気込みを感じる。今日からみて革命史観や「社会ファシズム」論など一定の時代的な制約が存在する。それでも共産党とその歴史に対する厳しい批判が目を引く。「結論 日本労働者運動の教訓と課題」では、「重要なことはこの党〔共産党〕が、終始プロレタリアートの利益を代表し天皇

制政権と侵略戦争にたいする唯一の実践的闘争者たる実をしめしながら、しかもその階級闘争の計画的指導と運動内部の日和見主義・改良主義にたいする闘争においていくたの誤謬と失策とをおかしたという厳たる事実である」とある<sup>32)</sup>。このあと、歴史上の「誤謬と失策」が数多く列挙された。

このため、同書と発行元の社会経済労働研究所は、日本共産党から批判された。『アカハタ』339号（1948年4月1日）に掲載された内野壮児による「書評 「近代日本労働者運動史」はよくない本である」、『前衛』27号（1948年5月）に掲載された松本巖「理論と実践の統一の重要性 社会経済労働研究所批判」がそれである。前者では「斗争しつつあるプロレタリアートにとって有害」とあり<sup>33)</sup>、後者では「大阪のマルクス趣味者の一団」「本書は、大阪地方のみならず、東京その他にもお山の大将をきめこんでいる新労農派諸君の立場を代表する典型的な見本」などと記された<sup>34)</sup>。なお、筆名・松本巖は党中央委員候補の岩本巖だとされる<sup>35)</sup>。

渡部旧蔵のスクラップ帳には、松本原稿に反論した直筆原稿が存在する。そのタイトルは「近代日本労働者運動史」への批判に答う」である。そこでは松本の原稿が完膚なきまでに批判されている。「松本君は歴史と現実とをとりちがえ、労働者運動の歴史的研究が直接現在の運動への指令書なるかのごとく錯覚し、本書のごとき歴史書に対する批判から直ちに現実的な「佐野・鍋山輩の従僕」云々というごとき政治的批判にまで飛躍してしまっている。」<sup>36)</sup> 内容をみれば、『前衛』への掲載をみこして執筆されたもようだが、掲載された形跡はない。

そこへさらなる災難がふりかかる。本書のために共産党側から査問されたのである。この経緯を渡部は次のように回想する。

当然、私は査問委員会みたいなものに何回か呼び出され、内田穰吉さんからつるし上げられました。しかし私は「間違いは認めん。意見の違いである」とがんばり、自己批判を拒否しました。結局、党の決定ということで、この本を絶版にする、そして以後、私の書くものは党の検閲を経た上で発表する、という処置に従わされたわけです。当時の私は、党の決定には無条件に服従しなければならないという鉄の規律にガンジガラメになっていたわけです。<sup>37)</sup>

実際、これ以降、これまでとはうって代わり、渡部記名の原稿があまりみられなくなった。こうして事実上、渡部は研究発表の機会を奪われた。救いだったのは、同じ時期に、生活と研究環境がしだいに整いはじめたことである。彼は、京大大学院に在籍しながら、1947年4月から翌年11月まで大阪経済専門学校講師・教授をつとめた。続いて、同年12月から京大の人文科学研究所で研究員として関わるようになった。これが縁となり、49年5月から京大人文研に助教授として就任する。同所への就職は、フランス革命の研究で知られる河野健二が関

わっていた。河野は渡部没後の回想で次のように述べている。

渡部徹君とのつき合いは長い。彼が京都大学経済学部の学生で、私が同じ経済学部の助手をしていたとき以来だから、今では優に半世紀をこえる。戦後、人文科学研究所が改組されて、従来の中国研究のほかに西洋研究や日本の研究もつけ加えることになったとき、私は西洋部の助教授であったが、新設された日本部の助教授のポストに渡部君を推薦し、それが所員会で承認されたことを記憶している。

その頃の彼は、大阪の経済専門学校に勤める意気さかんな青年教師であった。京大に勤めることになったとき、私たち経済学部にかかわりをもつ有志が、彼を含む人びとの歓迎会を開いたことがある。あいさつに立った彼は、開口一番、「おれはこれから、京大の官僚的体質を叩き直してやる」と宣言した。学生時代、学生運動の嫌疑をうけて逮捕されたことがある経験に由来するものだったと思う。<sup>38)</sup>

河野も京大経済学部出身で、1940年に同学部助手、46年に山口経済専門学校教授となったあと、翌年に京都大学助教授（人文科学研究所）に着任した。河野は人文研に渡部が来てから、一緒に『資本論』の勉強会をやったという。しかし、渡部は、「予てから考えていた労働運動史、社会解放運動史の方向に自分の進路を定めてそれから後は史料集め、史料の整理、それを本にまとめる仕事を営々として働き蜂のように朝早くやってきて夕方決まった時間まで研究室で仕事をするをやっております。」<sup>39)</sup> 渡部の研究に大きな転回があったことがわかる。

渡部は入所から3年間の個人研究のテーマを「第一次大戦後の日本に於ける労働運動」と設定している。これ以前から、彼は労働運動史の著作を準備していたと思われ、入所まもない1949年6月に『日本の労働運動』（三一書房）を刊行した。これは内容から『近代日本労働者運動史』を元に加筆修正したものと思われる。ただし、時期は敗戦までとなり、叙述も啓蒙的なものになっている。なにより共産党の歴史に対する厳しい批判が消えた。

これは、刊行にあたり、党側の事前チェックが働いた可能性がある。渡部徹関係資料中には「渡部徹「これまでの日本労働運動のはなし」という書き付けが残されており、1949年5月発表の原稿の途中に貼り付けられている。冒頭には、「大体ノ論旨」として「(A) (イ) 以前の著書〔傍線を引いて「近代日本労働者運動史」と説明追加〕よりも、はるかに傾向が改良されている。／(ロ) とくに、党の運うごきについては、非常に神経過敏と思われる位に注意が払われている。」との記載がある。本文の指摘では「社会党の徹底的なバクロが必要である」「未だ社会党的な残滓がある」「このためにも、一段と革命的立場に立つべきである」などの書き込みから、共産党に近い人による指摘と考えていいだろう<sup>40)</sup>。これらを見ると、党側にとっては、学術的な水準の高さよりも、党のプロパガンダと革命路線に沿ったものが優れた「研究」で

あったようだ。しかし、渡部が新たに赴任した職場は、こうした権威を相対化させながら、自身の研究スタイルを確立させていくことが可能な場であった。

### 3 コミンフォルム批判以後の研究活動と日本共産党との戦い

自由な研究・言論活動が制限された渡部は、主として組合運動に力を注ぐことになった。彼は人文研入所後すぐに京都大学職員組合に入り、1949年7月から翌年4月まで書記長をつとめた<sup>41)</sup>。1950年代前半には、京都地区大学教職員組合連合委員長、日教組近畿地区協議会大学部幹事長にもなった。彼の記名原稿はほとんどないが、彼が陰に陽に関わったであろう声明や報告書が一定数残されている。

渡部にとって状況が好転したのは、1950年1月の、いわゆるコミンフォルム批判がきっかけであった。コミンフォルムからの日本共産党に対する批判をめぐっては、主流派（所感派）と国際派に分かれ、党内闘争が起きた。これにより、「50年分裂が起ったので、検閲などはご破算になりました」と渡部は語る<sup>42)</sup>。

とはいえ、「検閲」がなくなっただけで、1955年の六全協にいたるまで、激しい党内対立や武装闘争方針の余波は渡部にも及んだ。日本共産党は1951年2月に第4回全国協議会、同年10月に第5回全国協議会を開催し、主流派が主導する形で「軍事方針」と綱領を採用して、以後武装闘争に取り組んでいく。

渡部自身の立場は、武装闘争には組せず、主流派が多数を占める京大や関西にあってその方針に批判的だった。この時期の彼の主張がうかがえる論説がある。『同志社学生新聞』96・97号（1953年6月11・21日）が組んだ特集「民族解放・独立のために」に投じられた「平和運動と民族解放 その優位性の問題について」である。そのなかで渡部は、「平和擁護や民族解放運動が抽象的観念的に考えられている」ことを指摘し、両者のいずれが優位であるべきかという議論を牽制した。「現実的に社会的運動として具体的、日常的問題と結びつかなくては発展はありえない。従って現実的具体的運動ではそれが平和擁護か民族解放運動かという詮議立ては恐らく無用の議論にしかなりえないだろう」<sup>43)</sup>。「国民の側」から自らの運動を捉え返す姿勢は、労働者運動史に取り組む彼ゆえの問題提起だった。

彼の主張が伺えるもうひとつの原稿もみておこう。『立命館学園新聞』649・650号（1954年1月11日）に掲載された「必要な階級的統一 基礎となる経済闘争」である。渡部は「米日独占資本による収奪からいかに国民生活をまもるべきか」を考えるために、まずは「たたかひの先頭部隊であり指導勢力でもある労働者階級の陣列をいかにして強化するか」に取り組まなければならないと主張する。ただし、現在の状況は「進歩陣営」ですら問題を抱えていると指摘する。「従来進歩陣営の一部には労働者階級の戦列の強化とその抵抗の成果のみを一方向的に強

調し、すでに今日労働者階級はさきへのべた課題を担いうるに足るだけの勢力となっているかのような独りよがりの自己陶酔的主張が行われその結果希望的観測によって状勢を観念的に判断し果さねばならぬ任務を盛り沢山に提出しかえって足元をみうしなわせる危険な傾向さえうみだしたのである。」このように観念論を戒めながら、彼は「何よりも労働者階級の団結をつよめ、統一を強化することこそ（「統一戦線の結成」）今日解決しなければならない第一の課題」だと述べた。ただし、政治的な統一戦線ではない点が渡部の主張の特徴である。すなわち、「経済闘争、とくに賃金闘争を通じての統一闘争が真剣に考えられるべき」だと語っている<sup>44)</sup>。

次に、コミンフォルム批判以降の渡部の研究活動をみていきたい。彼は人文研では重松俊明班長の「日本の近代化」班に所属していた。1949年4月に同班で「日本労働運動史方法論序説」というタイトルで報告している<sup>45)</sup>、自身の方法論を模索していたことがわかる。

研究再出発の狼煙は、日本労働組合全国協議会（全協）の研究だった。『人文学報』1号（1950年12月）掲載の翻刻資料「日本労働組合全国協議会（全協）史資料（一九二九年末まで）」に始まり、同誌2号（1952年3月）の「日本労働組合全国協議会の成立事情」「日本労働組合全国協議会（全協）史資料（一九三〇年一月—三一年四月）」と、『大阪経大論集』4号（1952年6月）掲載の「四・一六事件後の全協の再建過程 極左冒険主義の発現」、そして『人文学報』3号（1953年3月）の「全協刷新同盟問題について 日本における赤色労働組合の分派闘争」と続く。これらの研究の意図は、翻刻資料に基づき「正確な史実を確定」<sup>46)</sup>することにある。それにくわえ、論説の冒頭には「歴史的事実の解明を中心とする故に、論評その他価値判断は極力さげた。従つてここでは何らの結論もださない」<sup>47)</sup>と断り書きが記された。たしかに、事実に基づく記述と資料引用を駆使することで、研究が政治に巻き込まれることに対する強い警戒が滲みでている。

しかし他方で、渡部の研究は同時代の政治をみすえたものだったと筆者は考える。その傾向がみてとれるのが、彼の論文「四・一六事件後の全協の再建過程 極左冒険主義の発現」である。これは、田中清玄ら率いる日本共産党（現在の研究では「武装共産党」時代などといわれる）と全協の関係を検討したものである。ここで渡部は、全協という労組の自律性に力点を置いて歴史を叙述している。例えば、「この間全協と党との区別はいよいよ曖昧化され、組合員に共産主義的世界観を要求し、全協は恰も党組合部であるかの傾向を濃化していつたのである」という表現から渡部の関心がどこにあるかがえるだろう<sup>48)</sup>。しかも、その後の武装闘争（「極左冒険主義」）が全協にも及んだことと、その後彼らの「自己批判」があったことを述べていることから、同時代の共産党の動向とその未来を念頭に置いていた可能性がある。

これとほぼ同時期に発表された「日本労働運動史に関する一考察 社会民主主義と赤色労働組合主義」（『大阪経大論集』6号、1953年1月）では、より俯瞰的に日本労働運動史を論じている。彼は、随所で自身の『日本の労働運動』を参照しながら、『前衛』に発表された「一九五

〇年一〇月の日本共産党臨時中央指導部」の文書にある労働組合運動史の叙述（日本労働運動史における赤色労働組合主義が弊害をもたらし、その始まりは1924年の総同盟・評議会の分裂とする見解）に批判を加える<sup>49)</sup>。歴史叙述に関するものとはいえ、公の場で党組織を批判したのは異例とっていい。

観念論に基づく「極左冒険主義」方針を批判し労働者側の統一戦線的な運動を起こそうとする姿勢が渡部のなかで確乎たるものになっていく。これは歴史研究とも連動し、この時期に渡部は「統一戦線戦術と人民戦線戦術」（労働問題研究所編『政治経済基礎講座』第一巻 日本革命と世界革命、岩崎書店、1954年）を発表した。同論は、神山茂夫『統一戦線戦術の諸問題』を参考文献のひとつとしてあげながら、労働統一戦線と人民戦線の歴史を描いたものである。「客観的・主体的諸条件の発展によって労働戦線の統一・強化を基本として、闘争の戦線がしだいに拡大し、農民・都市小市民・インテリ等の中産階級との提携にすすみ（人民戦線）、さらに一握りの独占資本・反動分子を除く全国民を労働者階級の周囲に結集させる国民戦線にまで発展していく。」<sup>50)</sup>

以上のような渡部の研究姿勢を、共産党側はしだいに問題視しはじめた。その発端となったのは、京大の学生新聞である『学園新聞』739・740号（1954年2月15日）に掲載された、神山茂夫の著書『戦後日本国家の諸問題』（青木書店、1953年）に関する渡部の書評だった。副題に「謙虚な自己批判に無限の示唆」とあるように、その逆の態度を示す党関係者を渡部は以下のように指弾した。「この点、もちろん内田穠吉氏のように「権威」の動揺するごとに猫の目のように説を改める人は論外だが、かつての論敵志賀義雄氏さえ恐らくこのような形での自己批判はなしえぬ業であることを思えば」<sup>51)</sup>云々。なお、内田は渡部をかつて査問した人物である。

この書評に対して、次号の『学園新聞』に山本一男の筆名で、渡部が言うに「卑劣なデマや中傷」のような反論が掲載された。そこで、さらに渡部から「山本氏の反論に答う 理論的裏づけのない批判 うんざりする大げさな罵倒」（『学園新聞』745・6号、4月19日）という反論が掲載された。

渡部は新聞誌上で反論する一方で、共産党側にも文書を送って対応を求めた形跡がある。すなわち、「質問書」（3月30日付）と「上申書」（4月19日付）の写しである。宛先は不明だが、自らが属する京大細胞の上位機関になると思われる。前者では「質問したいことは、あの一文にあるように党は神山をトロツキストと断定し、同書をトロツキズム理論と決定したことがあるのかどうか」<sup>52)</sup>と投げかけた。それに対する回答がなかったために、筆者（経済学部大学院生の党员）の名前を挙げ、「あの一文は明らかに党的立場を僭称して断罪の判決文の如き印象を与えています。あのような書き方は正式の党機関の決定にもとづいたときのみ許されると思いますが、あの一文について事前に党機関は内容と発表について承知して<sup>ママ</sup>いられ、正式に発表を

認めたものでしょうか<sup>53)</sup>などのさらなる質問を送ったようだ。

この一件から約半年後の9月24日の『アカハタ』に、突如として「反党的分子」だとして林久男、神山茂夫、神山利夫、栗原幸二の党除名処分が発表された。それとあわせて、彼らと協力のうえ、「党を内外から破壊しようとした次の分子と全党が断固として闘うべきことを決定した」として渡部徹、川島優、小山弘健、寺尾五郎、浅田光輝、新井吉生、茂木六郎の名も発表された<sup>54)</sup>。三月書房の宍戸恭一によれば、小山と渡部が属した社会経済労働研究所は、敗戦直後から、神山、栗原、宍戸が関わっていた日本経済機構研究所と交流があったという<sup>55)</sup>。先述の通り、渡部も神山の理論を評価していたが、それと「党を内外から破壊しようとした」こととはむろん距離がある。

この突然の発表を受けて、渡部は9月29日に、上位機関に「質問書」を送付した。『アカハタ』の「渡部徹」が自らを指すのかどうかの確認から始まるこの文書では、反論がいくつか列記された。その要点は、『アカハタ』での自身に関する記載内容を「重大な規約違反」であるとして告発することだった。「表現が最大級の言葉で書かれている点からみて、除名処分のようにはうけとれるが、規約44条によれば、除名は細胞で慎重に審議し上級機関の意見をきいたのちに細胞で決定する云々とある。しかるに私は細胞がこの問題に関し審議されたことがあることを聞いていない。」これは渡部に理がある反論で、党側は意志決定の混乱を露呈させていた。渡部は、規約違反が行われているとすれば「至急にアカハタ紙上における私に関する部分は取消してもらいたい」と要求した<sup>56)</sup>。

渡部は、10月1日にも「9月27日付アカハタ紙の発表についての意見書」をまとめた。ここでは、京大細胞が今回の『アカハタ』発表を感知していなかったことを伝えながら、「党規約の基本原則が生かされるか殺されるかの重大問題である」として、改めて「自己批判」を求めた<sup>57)</sup>。渡部によれば、その後日談は「京都の党——京大細胞は、アカハタのこの発表をみて、あわてて私を査問しようとしてました。——強制連行してリンチを加える企みがあったようですが、失敗に終わっています。査問の呼び出しはうけましたが、私は、それならまずアカハタの発表を取消してこい、そうすれば応じるが、そうでなければ応じられないと拒否したわけです。つまり、判決をさきに出しておいて、あとから取調べるなどという馬鹿な話があるかというわけです。それで結局、除名ということで、党との連絡を一切切られました」というものだった<sup>58)</sup>。

それでも渡部に対する攻撃は終わらなかった。彼は1954年7月に『日本労働組合運動史 日本労働組合全国協議会を中心として』を青木書店から刊行した。同書は前篇と後篇に分かれ、前篇は全協を理解するために一般向けの通史を描いたもの、後篇は『人文学報』に掲載した全協の通史的研究を再構成したものである。巻末には、これも『人文学報』で紹介した全協の資料が並ぶ。彼の元論文もそうだが、価値判断をできるだけ排して、資料にもとづく事実をして

語らしめるスタイルで書かれている。

しかし、そうした実証的で、かつ公開済みの内容ですら、共産党側から非難が投げかけられた。六全協の直前となる1955年5月の『前衛』104号に大木定五郎の名義で書評が掲載された。冒頭に「まったく事実をゆがめ、党と労働者階級の闘争に傍観者的批判を加え、きわめて悪質有害な役割をはたすもの」と記されている<sup>59)</sup>。その非難の背景は書評を読み進めると明らかになるが、「この本の反革命的性格は、全協のなかで党の指導に一貫して反対してきた、神山茂夫を先頭とする刷新同盟の活動を正当化する目的で書かれているところに集中的にあらわれている」とされた<sup>60)</sup>。つまり、先の『アカハタ』で公表された政治的判断が研究書の評価に及んでいた。

この書評に対し、渡部は、翌年2月1日付で、「書評に名をかりて誹謗と中傷を目的としたもの」だとして中央機関紙・誌編集委員会宛に詳細な反論を送り、『前衛』における当該書評の取消、あるいは筆者の自己批判の掲載、渡部及び青木書店への陳謝を求めた<sup>61)</sup>。これに対して、2月10日付で、「前衛編集部」から関西地方委員会経由で渡部に返信があり、六全協後のためか、「常識的にも許されない、攻撃の仕方であつた」として、「編集部で事実もたしかめずのせた責任について深くおわびしなければなりません」と陳謝した<sup>62)</sup>。

以上渡部の研究と活動が党内政治に巻き込まれていく過程をみてきた。六全協（1955年7月）の前後で党内の方針が大きく変わるなかで、渡部がどのように対応を迫られていくのか、後述したい。

#### 4 六全協後の党復帰とその後

自らも所属する権威ある党との闘いは、現在からは想像できないほどの苦難だったと思われる。それでも渡部が研究者として自身の研究を積み重ねられたのは、その徹底した実証スタイルゆえだった。もうひとつは、京大人文研という職場と同僚の存在である。人文研にも党員がいたが、党から公然と批判された渡部が孤立した形跡はない。1954年1月に京大人文研日本部に就職した井上清は、党員でありながら、渡部と共同研究班を運営した。その始まりは同年夏から始まった米騒動の研究班であり、以後も研究班をともに運営しながら成果を積み重ねていく。

渡部は、職場以外にも重要な交流の場をもっていた。それが京都人文学園である。これは新村猛を学園長として、1946年に御所の東で開校した私設学校だった。新村や中井正一、久野収、和田洋一ら、いわゆる「京都人民戦線事件」の関係者が学校を支えたほか、戦前に京大学生運動に取り組んだ佐々木時雄も主事として関わった。

京都人文学園は京大人文研との関わりもある。新村と交流のあった所員の重松俊明が学園創

立時から講師として関わっていた<sup>63)</sup>。彼は当時京大文学部講師だったが、1949年4月から人文研に教授として就任した。ほかにも、桑原武夫や河野健二、鶴見俊輔といった西洋部教官も1950年代初頭に人文学園で講義を持った<sup>64)</sup>。新村の回想によると、学園の事務局員の横地直子、寺村幸子も人文研で働いていたという<sup>65)</sup>。

渡部と人文学園との関わりは、1951年4月の「京都人文学園入学案内（夜間部）」から確認できる<sup>66)</sup>。日本史の「近代」の分野で、渡部が「日本ファシズムの諸問題」の講義を担当することが記載された。翌年4月以降は渡部の名前が入学案内に恒常的に列記された。この時は一講師にすぎなかったが、1956年4月に人文学園を安永武人より引き継ぎ<sup>67)</sup>、社団法人京都勤労者学園への引き継ぎ、同法人による京都労働学校設置（1957年）に尽力した。

まず財政的援助を仰いでいた関西文理学院からの援助打ち切りの通告を受けて、通学に不便な校舎の移動を目指して府市との折衝（府は藤田二郎労政課長が窓口となった）に取り組んだ。しかし、いずれもうまくいかず、「市の援助をうけうる体制づくりに踏み込んだ」が、「古い人文学園の卒業生の間に、渡部が人文を市に身売りしようとしているというデマ」が流れ、「久野収さんまでが憤慨して、私（渡部）に思いとどまるよう説得にこられた」<sup>68)</sup>。

この渡部の一連の取り組みは、京都勤労者学園に残る資料「講師会議記録」（1956年12月）にも詳しい（資料篇 翻刻資料Ⅳ）。渡部の説明では、8月の段階で京都勤労者教育協会（1953年に京都の労働組合、学者、文化人が集まって労働者教育の援助・発展のため設立）と人文学園が協力していく話があった。協力の話しが進展するきっかけは、市からの申し出だったようだ。「市の方から勤労協と人文が統一して一本化する条件が揃えば100万円～200万円積極的に援助しようという話が出て来た」と渡部は話す<sup>69)</sup>。これを受け、人文学園の理事会では、京都勤労者教育協会と統一して府市より支援を受けることが決まった。彼らは交渉委員を組織して、9月10日前後に勤労協に正式に統一を申し入れた。京都勤労者教育協会も賛成して交渉委員を選び、10月に入って統一への交渉が進んだ。とはいえ、人文学園内で異論も存在し、市の関与によって学園の教育の自律性が脅かされるのではないかという意見と、心配には及ばずという渡部らの意見のせめぎ合いが講師会議ではみられた<sup>70)</sup>。

最終的には統一へと向かうが、そこで渡部の実務・交渉能力が発揮されていたことがわかる。後年、「私は、この機会を逸しては、京都の勤労者教育を一層発展させることは不可能であり万難を排してでも達成しなければ、人文学園自身数年後には野垂死にすると確信していた」<sup>71)</sup>と強い言葉が記されている。研究所での個人・共同研究の一方で、市民への教育にも渡部が情熱を注いでいたことがわかる一文だろう。コミンフォルム批判以後、渡部が次第に共産党への厳しい姿勢を取り戻してきた背景には、単なる党内事情だけではなく、京大人文研や京都人文学園で培った共同性があったのではないかと思われる。

さて、渡部の研究活動と共産党との関係に戻ろう。渡部の活動にとって、最大の障壁が共産

党の存在であった。しかし、その共産党も六全協（1955年7月）で主流派（所感派）・国際派の「統一」がはかられ、地方の支部組織もその対応に迫られた。黒川前掲論文によると、六全協が開催された2か月後の1955年9月に関西地方党会議が開催され、六全協後の対応が話し合われた。そのなかで、渡部徹に対する党の対応をめぐる翻弄される京大細胞の様子について「芝原」から報告があった。

たしかに、関西では、渡部の処遇をどうするかがひとつの焦点となっていた。引き続き、党の対応を問題視し、適切な対応を求めたのはほかならぬ渡部本人である。彼が春日正一（神山除名を発表した時の党中央指導部議長）に送った文書の写しが残されている<sup>72)</sup>。まずこの資料には、『アカハタ』誌上での神山・渡部ら除名・批判後の状況が記されている。渡部にとって幸いだったのは、党の権威になびく人びとが京大細胞内では限られていたことである。

当時の状況について「私どもの京大細胞には研究者の中に私の「アカハタ発表」の処分を頂点として私の処分が理由なくかつ規約違反の処置であるということで反対者多くその反対者及び批判者は私の所属班全員はじめ外の四つの班で数名が組織からボイコットされたり不当な差別待遇をうけていました」と渡部は語る。所属班とは人文研班を指すのだろう。同じ「派」でないにもかかわらず、井上清ら同僚党員は渡部を擁護したのだった。渡部が党側と戦えた背景があきらかになる。

興味深いのが、関西地方党会議と同月に渡部処分問題に関し、渡部は春日と面談を行っていたことである。9月24日に2人は以下の項目につき「相互に納得」したという。

- 1、私〔渡部〕どもの処分は六全協決議で原則的に取消したことになっている。
- 2、中央がかつて神山分派と考えていたものは事実において分派組織でないことが明瞭となつたので中央で一括解決する方針を改め夫々の所属機関で解決する。
- 3、スパイ容疑があると京大細胞の代表にいつたのは（九月中旬）現在なお疑惑があるというのではなく当時色眼鏡でみたため起つたことでありそれは中央の重大な誤りであつたこと従つてこの件について調査すると云うのは下部機関から史料があげられており、そのまゝしておけば将来一部のものが疑惑をもち統一後の団結に支障を来すおそれがあるのでこの際事態の発生した根源までさかのぼつて究明討論し将来にワダカマリを残さぬ措置と理解されたいこと。
- 4、神山茂夫の問題もすでに峠をこし近く解決することそして解決後アカハタで発表すること。

これに依拠するならば、春日（党本部）側から渡部へのほぼ全面的な謝罪といえる。党側の過誤を認めたこの会談後、渡部は「ことがはつきりしたので非常に喜んで帰洛した」。

先の春日との面談では、党本部側の「誤り」を「所属機関」で解決するという内容になっていた。このため、京大細胞では「関西」（関西地方委員会カ）と「府委員会」（京都府委員会カ）から党員が参加し、この問題が検討された。焦点は、渡部処分の理由が何かだった。これは第2回の会談で公開されたが、その内実に「列席者一同啞然とした」。「それは歴大な史料と中央から宣伝されていたに拘らずふたをあけてみればわづかに原稿用紙二枚足らずの簡単なものであつただけでなく、そこに記載されてあることは輪田〔一造〕同志のいうごとく「じつにタワイのない」ことで仮に凡てを事実としても——実際は事実として意味のあることは皆無であるが——除名はおろか凡そ処分には値するものではないというのが出席者一同の確認したところであります。」つまり、根拠が希薄で、処分ありきの対応だった。この対応をめぐる状況説明と、渡部の春日への「質問」はその後も続く。

渡部は、11月6日の京大細胞全体会議に1年有余ぶりに参加した。ここで指導部に入ることを請われて承諾した。さらに12月10日の京大細胞会議では新たな組織である京大職員細胞の責任者を引き受けることとなった。渡部らは翌年1月にかけて、『アカハタ』発表をだすにいたった経緯の説明を党中央委員会常任幹部に求めているが、党中央からの対応があったか否かはわからない。

その後、神山除名に関する件につき『アカハタ』1956年5月19日号に日本共産党中央委員会名義で「若干の同志たちの除名および処置の取消しに関する決定」（1956年5月15日付）が公表された。これは六全協で選出された中央委員会常任幹部会が神山に経過を聴取したうえで、統制委員会にこの問題を再審査させ、その報告結果をまとめたものであった。それによると、「当時の党中央のとした処置は誤っている」とした一方で、「同志神山の除名前における行動にも遺憾な点があったし、除名後にとった行動には共産主義者の自覚的規律に反するものがあったことも明白」「発表された人々のうち一名を除いては、同志神山を中心とするグループの関係にあったことも明白」だとして両成敗的な内容になっていた<sup>73)</sup>。

この内容に対して、渡部は怒りをまじえて「アカハタ 五月一九号掲載 中央委「若干の同志たちの除名および処置の取消しに関する決定」についての意見と質問」を作成した。「京大職員 S 坂口信三」名義だが、内容から渡部だとわかる。下書きのため、送付先は記されていないが、党中央委員会宛だろう。その筆致は以下のように厳しい。

…この発表文は全く承服しがたい。そしてこのような発表を敢てした中央について、これまでも、現中央を構成している若干の人々には、疑惑をいだかざるをえなかつたが、いまこのような発表文をみるに及んでは、中央の各人への信頼は大きく、そこなわれたことを、表明せざるをえない。その品性と誠実さの点で、この発表が全党の範となりうるものかどうか、再思三省してもらいたい。そしてそのさい五四年九月の発表が一面の殆んど全紙に

わたり、しかも同年末まで、連日アカハタ紙上で、除名支持カンパを全国的に組織し、また前衛誌上やマルクス・レーニン主義誌上で、恥も外聞も忘れたような狂態を演じた事実、そしてありとあらゆる方法で、全組織をあげて、私どもに対し中傷と迫害を加へた事実、川島優君をこのため死に追いやつた事実等々——を想起してほしい。<sup>74)</sup>

六全協後の党中央の「反省」は「自己弁護」「その面子を維持せんこと」によって塗りつぶされた形となった<sup>75)</sup>。「本当の共産党に作り直すのだ」と意気込んでいた渡部だったが、「やがて宮本顕治は我々の動きなどを打撃主義と称して、抑圧に転じはじめ、そこへスターリン批判が出たのでしだいに党にアイツがつき、1959年4月に離党を声明しました。」<sup>76)</sup>

とはいえ、スターリン批判から自身の離党までには少し間隔があいており、離党には別の要因が関わる。これは沢村義雄（本名は大屋史朗、別の筆名は西京司）の党除名問題が関係する。沢村は京大細胞、京都府委員会に所属していたが、彼が京都府委員会に提出し、のちに『府党報』号外に掲載された論文「レーニン主義の綱領のために」が「トロツキスト」として問題視・批判され、府委員を罷免され、京大細胞を除名された。

渡部は沢村に対する処分を受けて離党を表明した。この時作成されたのが坂口信一名義の「離党証明書」（1959年4月）である<sup>77)</sup>。坂口は、「彼〔沢村〕とは問題のおこる前から意見は全く対立していた」が、除名には反対だった。しかし、除名が決行されたことが離党の引き金になった。坂口がいうには、「今回の沢村問題の本質は、意見の相異は討論によって解決するという原則をくずし、行政的処置を先行し、党中央はじめ各級機関が党内民主主義の原則を蹂躪したと考えるからである」と述べる。これは沢村除名の過程で、かつての坂口（渡部）に対する党の一方的な対応が繰り返される光景を認めていた可能性もあるだろう。

この「離党証明書」には、坂口の六全協以後の党に対する失望も記されている。「六全協の直後、党中央は、率先して全党的な自己批判と相互批判の整風運動を、徹底的に展開するのではなく、打撃主義などと称して、こうした下からの動きを極力押しつぶそうと、懸命の努力をはらった。」ただ、党に対する失望だけでなく、その党のなかにあって党をしかるべき方向に導くための努力を充分できなかった自分への批判も記されている。「この間にあって、悪戦苦闘した私のえた教訓は、党風刷新のためたかうには、同憂の士が強固に組織的に団結し、しかも全生活を投じて奮闘するのでもなければ、効果をあげえないということであった。しかし、私は、小ブルの限界というのかもしれないが、独自に組織をもつ元気も全生活を投ずるだけの決心もつかなかった。そこで、結局サジを投げざるをえなかったのである。」また、彼は自身のこれまでの党中央への抵抗が、結局は、党に対して消極的になった党員の「無活動」を擁護する役割を果たしただけではなかったかとして、党内にとどまることの疑問を感じて離党を声明したのだった。

## 5 渡部史学の転回と「事実史」

最後に、六全協以後の渡部の研究を振り返っておこう。この時期、渡部は多くの編纂事業に関わった。

まずは、京大人文研との関係からである。京都大学人文科学研究所・林業問題研究会編『林業地帯 奈良県吉野林業地帯と徳島県木頭林業地帯の歴史と現状』（高陽書院、1956年）の編纂である。この書物は現地調査がもとになっており、「昭和二八年夏に徳島県木頭地帯を、二九年および三〇年の夏には奈良県吉野地帯を対象として、三ヵ年に亘つて行われたもの」<sup>78)</sup>である。この調査は、人文研の元所員で、のちに大阪市立大学文学部にうつった天野元之助を主任としてはじまった（天野の転出にともない河野健二が代表となる）。京大では人文研から河野、渡部、飯沼二郎、今西錦司、藤岡喜愛、牧康夫、吉田静一、経済学部から山岡亮一、堀江英一、農学部から三橋時雄、半田良一、医学部から西尾雅七、村上宏、教養部から姫岡勤、あと立命館大、関西大学、甲南大学、島根大学、山口大学などの教員を含んだ学際的なメンバーだった<sup>79)</sup>。

渡部は吉野の林業地帯を扱った第1編の第3章「山林労働と労働組合」の執筆を担当したほか、同書の編集・校正を河野健二と吉田静一とともに担当した。同書の目的は、渡部のまとめによると、「山村」といわれるものにも、明らかに二つのカテゴリーがあり、林業地帯である山村は、その林業が発展すればするほど、資本主義的諸関係が浸透し、一般の農村と比較しても、近代化がすすんでいるということが、あらゆる面から明らかにされた」ことを実地調査を通して実証したことであった<sup>80)</sup>。

人文研と関わる、もうひとつの編纂事業としては、井上清との共同研究班「米騒動の研究」の成果がある。人文研助手として同班に関わっていた松尾尊兌が1950年代後半に米騒動に関する論文を発表し、井上清や渡部も米騒動の論文を『人文学報』7号と8号に掲載するなど個別の成果発表が続く。

これらの集大成として1959年から62年にかけて井上と渡部の編纂で『米騒動の研究』（有斐閣）を5巻にわたり刊行した。「この全国的事件の全体の総合的な研究」<sup>81)</sup>をめざした本書では、研究会に参加した井上、渡部、松尾、田中裕、後藤靖、江口圭一、里上龍平、吉田樹美子、山本四郎が全国の各県を担当して米騒動の全体像を捉えようとした。

渡部は「岐阜県」「大阪府」「東京府」（吉田と共著）「その他関東地方諸県」「山梨県」「愛媛県」（吉田と共著）「福島県」（吉田と共著）「兵庫県」「福岡県」（後藤と共著）「北海道」「米騒動の構造」と多岐にわたるほか、全体のとりまとめを担当した。

後年、井上清は同著について「実質的には渡部さんがすべてをとりしきってくれた」<sup>82)</sup>として、その仕事を以下の様に列挙する。

『米騒動の研究』は、細川嘉六氏蒐集の新聞雑誌記事、裁判記録、個人の回想などの膨大な資料を中心としたが、私はその資料を細川氏から借りだすのに役に立っただけのことで、この膨大な資料を整理してカード化する、それにもとづいて、各府県別に、騒動の実態を記述する、また「事件」の实地調査、関係者からの聞き書きをつくる、これらのことはみな渡部さんが中心となってやってくれた。またこの研究・出版に、文部省の研究助成金、出版助成を受けたが、このための役所への面倒な書類等々も渡部さんが手ぎわよくやってくれた。<sup>83)</sup>

まさに目立たない、面倒な仕事を渡部が一手に引き受けていた。井上が言うように、「渡部さんなしには、この研究はまともになかったであらう」ものだった<sup>84)</sup>。研究成果の結果だけをみれば、渡部の編著と論文がみえてくるだけだが、その成果の前後（とりまとめの過程と資料のアーカイブ化）も含めて研究をとらえるならば渡部の貢献は長く、大きかった。

さて、ここからは職場から離れて、渡部個人の研究に歩みを進めてみよう。

渡部は敗戦後に小山弘健の社会経済労働研究所で研究していたように、アカデミズムの内部だけに学問があるとは考えていなかった。そのひとつの取り組みが前章でみた、京都人文学園での教育であった。学園との関係で、渡部は京都勤労者教育協会との統一に尽力していたが、これ以前から渡部と地元の労働運動家 OB との交流が生まれつつあった。

そのきっかけとなるのが京都地方労働運動史の編纂事業である。渡部によれば、編纂の希望自体は総評京都地評事務局長の黒田誠一、京都府労政課長の藤田二郎から 1953 年秋頃には伝えられていたという。渡部ら研究者の側も 1954 年から体制を組んで準備を進めていた。メンバーは住谷悦治、岸本英太郎、渡部徹で、ほかに松尾、高桑末秀、山本四郎、坂上（吉田）樹美子がいた。編纂に向けた研究方針として、資料を幅広く渉猟したうえで、関連ある記事と文書をカードに記録して整理し、京都地方労働運動史年表を作成すること、この年表に基づいて関係者から聞き取り調査を行い「資料的事実の当否を確め、その前後の事情を明らかにする」ことをめざした<sup>85)</sup>。

実際は、年表作成と聞き取りは同時並行で行われた。聞き取り調査にあたり重要だったのが戦前京都の社会・労働運動家が集まった京都旧友クラブ（1956 年設立）の存在である。同クラブの総会（1957 年 4 月）で、編纂刊行の趣旨を訴え支援と協力を得ることになった。これによって編纂事業は「画期的躍進」をとげ、京都府・京都市・旧友クラブ・総評京都地評・京都民間労組、執筆者のグループで 1957 年 7 月に京都地方労働運動史編纂会（代表は朝田善之助）が設立された。聞き取りの範囲が拡大するとともに、資料が続々と提供された。

1957 年夏から調査と併行して執筆に入り、最終的には 400 字詰 6250 枚の原稿が完成する。第 1 編「明治時代」（全 3 章）は山本、第 2 編「組合運動の生成と発展（大正二年—四年）」（全

9章)は松尾, 第3編「評議会と労農党の活動(大正一四年-昭和三年)」(全8章)は高桑, 第4編「闘争の激化と戦線の錯綜(昭和三年-七年)」(全25章)は渡部, 第5編「戦争と運動の衰退(昭和七年-二〇年)」(全17章)は坂上が担当し, それぞれの草稿を渡部が編集した。

編者の渡部自身はこの本の趣旨を「無慮何千人かの無名戦士の氏名と事績を永く後世に記録したこと, また今後の研究者のいろいろな観点からの研究に素材を提供しえたことだけは充分果しえたと思う」<sup>86)</sup>と謙虚に語る。渡部の編纂事業の手腕がいかに発揮された, 戦後の労働運動史研究に残る成果とみてよいだろう。

渡部の数ある業績のなかでこの『京都地方労働運動史』に着目した人物に飛鳥井雅道がいる。飛鳥井は1958年に人文研助手として採用された渡部の同僚である。共産党員だった彼は, 党内における渡部の難しい立ち位置も知っていた。彼は渡部と職場を同じくするようになってからも, 「先生の怖さの方が先にたった」という<sup>87)</sup>。その飛鳥井が, 渡部の理論を理解できるようになるきっかけが『京都地方労働運動史』であった。やや長くなるが, 飛鳥井の言葉を引用しよう。

二段組み, それも小さい活字で一五八六ページ(全原稿枚数六二五〇枚)という, 枕にしても大きい大著の「昭和三七一年」が, 先生の直接執筆部分だが, 先生は京都という地域に密着しながら, 戦前共産主義運動史を活写された。革命運動の方針と, 京都の活動家の小さな個人的な体験とが綿密に組み合わせられて, 叙述が続いてゆくのに圧倒されたし, 読者として, 息もたえだえになりながら読み進んだ。

五三年の本〔『日本労働組合運動史 日本労働組合全国協議会を中心として』を指す引用者〕では, こわもてした印象の理論が, この本では歴史のなかで試され, 苦痛の呻き声をあげていた。昭和三年に華やかに登場し, 昭和七年にほぼ全滅した大衆運動としての共産主義の末期までを, 先生は描き出したのだが, これ以上の描写をおこなえた運動史はまだないだろう。本が大きすぎるため, 皆敬遠して, 読まずにいるのではないだろうか。

この本が書かれた時期も, 戦後史の区切りになる時期だった。この本は一九五五年から具体化したらしい。つまり, 五五年体制が成立するころ, というより, 社会運動としては, 「六全協」で革命論議のひとくぎりがつき, 六〇年安保闘争に向かって大衆運動の再建が試みられてゆく時だった。先生は, 運動の再建は, 「昭和三七一年」のようなものであってはならないと, 歴史のなかに渡部理論を再構築しておられたに違いない。<sup>88)</sup>

「渡部理論」とは, 労働組合運動に社会主義の課題を持ち込むべきではないという考え方である。飛鳥井によれば, 当時は「異端の理論」をこえて, 「警戒すべき理論であり, 「反党的理論」だった<sup>89)</sup>。これを実際の歴史で検証し, きたる「六〇年安保闘争」へと接続しようとし

たのが『京都地方労働運動史』だったことになる。

六全協以後の渡部が書いたものをみると、たしかに彼のなかでいくつかの変化が生まれていた。1956年11月に発行された大河内一男・向坂逸郎・高島善哉・都留重人・名和統一編『日本の社会主義』社会主義講座7（河出書房）に、渡部徹「暗い谷間 戦争と労働運動」を寄せた。これを読むと、以下のようにこれまでの見解が改められている。

……抵抗を挫折せしめた躓きの第一を、この二八―二九年の間の共産党の方針と活動にみとめなくてはならないことは否定できないであろう。この点でこれまで二九年四月の四・一六事件による共産党の指導的幹部の逮捕と指導の断絶、組織の破壊に、躓きの石をみとめてきた私の見解を改めるべきであると考え。<sup>90)</sup>

つまり、抵抗が挫折した要因を、外部からの弾圧よりも、より党内の問題にみいだすようになった。この要因とは、三・一五事件弾圧以後の共産党が合法政党結成に向けて活動しながら、コミンテルン第6回大会に参加した市川正一が持ち帰ったテーゼ（「植民地半植民地に於ける革命運動に関するテーゼ」）を受けて、その方針を急遽合法政党有害無用論へと転じたことを指す。

渡部は「率直にいてコミンテルン第六回大会の方針そのものは、運動に大きな貢献を果す面があったと同時にマイナスの面も否定できない（社会民主主義者を社会ファシストと規定した点、赤色労働組合主義を確立した点等）」<sup>91)</sup>として、日本にはとくにマイナス面が大きかったとする。渡部のなかで「社会ファシズム」論が克服されていることが確認できよう。上位機関から下位機関への機械的な方針の適用とそれにとまなう下位機関の思考停止と連帯の不可能性に渡部は問題を認めていた。

こうした見解の刷新は、渡部と党との関係の変遷もあるだろうが、研究者として昭和初期への知見を深めつつあったことも考えられる。六全協後、渡部は、現代史研究会という小さな研究会に関わっていた。この研究会を立ち上げたのは京都で三月書房を営んでいた宍戸恭一である。彼は、小山や渡部と出会うなかで、「こういう先生方の生き方を生かす方法はなかろうか、同時に私もそれに参加させていただいて、自分の考えをはっきりさせていきたいと考えて」<sup>92)</sup>研究会を1956年頃に設けたのだった。ほかには井上清や岸本英太郎（当時、京大経済学部勤務）も参加し、「月一回集まっていたら、主として戦前昭和期の問題をテーマにして論議していく研究会を数年間続けた」<sup>93)</sup>。

この成果は、大阪歴史学会の近代史部会が発行していた『近代史研究』（1956年7月創刊）に発表された。当初は同部会のみで編集・発行されていたが、3号（1957年12月）から5号（1958年10月）までは京都現代史研究会との共同編集となった。それゆえ、『日本史研究』掲載

の同誌広告をみると、「本誌は第二号まで大阪歴史学会近代史部会の機関誌であったが、第三号から京都現代史研究会が編集に参加した。京都現代史研究会は昨年来、小山弘健、井上清、岸本英太郎、渡部徹の諸氏を中心に毎月一回三月書房で日本現代史の研究を進めているが、本誌にはその報告・討論が順次掲載されている」<sup>94)</sup>とあり、三月書房や社会経済労働研究所の広告も掲載された。

先に紹介したいいわゆる「渡部理論」が明確に打ち出されたのはこの『近代史研究』3号誌上であった。渡部による研究の見直しは、方法へと進む。タイトルは「労働運動史研究の反省若干の史実についての問題点提起」である。渡部は「従来の研究視角に重大な点で誤りが少くなかつた」として、「率直にいつて、私をふくめ、これまでの進歩的研究者に共通した研究視角は、常に運動を評価にあたって夫々運動のつた政治的見解を基準にしていたのである」と述べる。「左翼権威主義」に研究者が「毒され」ることで、左翼・中間派・右翼が上位から下位へと価値付けされ、「善玉・悪玉」史観のような宿命的判断がここに加えられることになる<sup>95)</sup>。こうした見解にもとづく歴史研究から欠落していくのは、「事実」の掘り起こしである。渡部は以下のように述べている。

このような研究視角〔政治的見解優位の研究視角を指す 引用者〕からは、運動史研究が、そのかけげる綱領・政策・方針を調べることに以上でせず、それもきわめて大まかな材料で処理しうのだから、事実史的な探究は、さほど大きな意味はもたされない。また如上の観点で低くしか評価されない運動や組織については、断片的なマイナスの材料だけで片づけられてしまうのである。このことが一層事実史の探究をおろそかにさせ、今日みられるような、運動史の多くの分野が穴だらけになつてしまつて根因でないかと思う。<sup>96)</sup>

筆者なりに解釈すれば、ただ事実を掘り起こすことが「事実史」になると渡部は述べているのではない。その事実を掘り起こす際の自らの「政治的見解」や「善玉・悪玉」史観に自覚的か否かがまずは重要であり、その自覚に基づいて、「事実」を徹底的に比較検証していった先にあるのが「事実史」だということになるのだろう。ただし、渡部はそれで充分とは考えていなかった。なぜなら、それは観念論にとどまるからであり、場合によっては自己満足の域を脱しないからである。渡部は以下のようにさらに論を進める。

……これまでの運動に対する研究視角が、政治主義的、思想史的観点、いいかえれば運動史と運動思想史とが混同されている結果といつて差支えないと思う。ここに最大の反省すべき点があると思うのである。

……

政治主義的・思想史的観点で運動史を研究したことが誤りであつたとすれば、運動史の研究視角は、どこにおかれなければならないのであるか。私は運動史の研究視角は、何よりも、その組織なり運動なりが、現実は何をし、労働者大衆に現実は何をもたらしたかという、大衆行動の事実の巨細な総合の上に立たなければならないと思う。<sup>97)</sup>

この渡部の提起は、「本人が驚くほど大きな反響があった」という<sup>98)</sup>。この理由を彼は、小山と執筆した『近代日本労働者運動史』（白林社、1947年）によって「戦後はじめての階級史観にもとづく本格的な運動史の本として注目を浴びた渡部が、前著の方法論を否定するような所論を発表したことへの意外性もあったからであろう」と推察する<sup>99)</sup>。自らの政治性や価値判断に自覚的であること、さらにその自覚したものを「労働者大衆」側から捉え直して、「大衆行動の事実の巨細な総合」を描くことを渡部は提起したのであり、その実践の産物こそが『京都地方労働運動史』であった。

## おわりに

長く渡部と同僚だった井上清は、渡部の学問について次のように振り返っている。

……学者渡部徹について、もっとも特筆すべきことは、その学者的良心を、いつ、いかなる場合にも貫徹して、そのことではいかなる妥協もせず、いかなる圧迫にも屈しなかったということであろう。このことを具体的に語るには、当時の社会科学界、その中でも歴史と社会運動に関する研究に対する日本共産党の干渉と、それに対する抵抗の事実を明らかにしなければならないが、それは、エピソードを語るだけではできない。渡部さんの著作そのものを見てもらうほかない。<sup>100)</sup>

本論は、渡部徹の京都帝国大学入学から1960年の安保闘争頃までの軌跡と学問について、新たに発見した資料をもとに描いてきた。「歴史と社会運動に関する研究に対する日本共産党の干渉と、それに対抗する抵抗の事実」の一端を明らかにし、渡部がこの苛酷な政治的、学問的環境のなかでも「学者的良心」を貫こうとした姿勢を跡づけた。

最後に、渡部の軌跡と学問を振り返りながら、本稿のタイトルにもある「戦後歴史学」<sup>101)</sup>に位置づけることとしたい。戦後歴史学の先行研究のなかで渡部が登場することはほぼないが、渡部の社会・労働運動史研究が戦後歴史学の潮流にあり、時にその流れに棹さず役割を果たしていたことは本稿からも明らかであろう。

他方で本論では、戦後歴史学のなかで立ち止まる渡部の姿も明らかにした。戦後歴史学の先行研究では、戦後の歴史学と日本共産党の関係は自明のように扱われている。しかし、その記述は具体性に乏しく、党とその運動が歴史家と歴史学にいかに関与しようとしたのかが不鮮明であった。渡部の軌跡には、共産党との複雑な関係が影を落としている。非主流派だった渡部の研究は、当初から党の批判の対象となり、陰に陽に干渉を受けることがあった。この制約下で、いかにして自らの研究を進めていけばよいのかという課題に渡部は向き合わなければならなかった。

敗戦直後までは、経済学部出身の渡部の論述スタイルは理論に偏ったものが多かった。しかし、京大人文研に就職した頃から、資料の博搜にもとづく、密度の濃い実証的な歴史叙述のスタイルへ変化していく。また、叙述の変化だけではなく、共同研究を通して、資料の復刻・公開・貸与を積極的に進めていく渡部の姿があった。ここには、自らが所属する党という権威との闘い、学知を自らの権威のもとでコントロールしようとする党に対抗した学知の民主化が意図されていたと筆者は考える。共同研究の一方で、彼が京都人文学園での教育や、地域社会・労働運動の歴史編纂に積極的に取り組んだのはこうした背景があったからこそである。しかも、この学知の民主化は、党への抵抗にとどまらず、自らの歴史学を刷新していくことにつながる。本論では「渡部徹と社会・労働運動史研究」という副題を付けたが、渡部は政治的価値やイデオロギーを重視する社会運動と、労働者大衆が自らの生活を改善しようとした労働運動を分けて考えようとした。前者が後者を指導するのではなく、各々の運動を自律した運動としてとらえ、とくに後者の「大衆行動の事実の巨細な総合」を渡部は実証的に明らかにしようとした。これは自らの政治的価値やイデオロギーをも、ときに周辺で微細にもみえる歴史的事実に基づいて検証しうるものとなるのである。

註

- 1) 黒川伊織「渡部徹の歴史学 関西・社会運動史研究史序説」『大原社会問題研究所雑誌』741号, 2020年。
- 2) 第六高等学校編『第六高等学校一覽 昭和9年至昭和10年』第六高等学校, 1934年, 157頁。
- 3) 渡部徹「特高・留置場・軍隊〈上〉 戦時下の奇異な体験」『さんいち』10号, 1980年7月, 「渡部徹著作スクラップ帳」。
- 4) 渡部徹「藤田二郎君を悼む」『渡部徹著作スクラップ帳』。
- 5) 池上惇「故吉村達次先生略歴および業績について」『経済論叢』97巻2号, 1966年2月。
- 6) 前掲「藤田二郎君を悼む」。
- 7) 日本共産主義者団三十周年記念刊行会編『日本共産主義者団関係資料』日本共産主義者団三十周年記念刊行会, 1968年, 108頁。
- 8) 同前, 109頁。

- 9) 文部省学生部『学生思想事件一覧 第2輯 昭和7年8月（自昭和5年11月至昭和7年3月）』1932年, 963頁。
- 10) 京都帝国大学編『京都帝国大学一覧 昭和10年』京都帝国大学, 1935年, 435頁。
- 11) 内務省警保局編『社会運動の状況 13 昭和十六年』三一書房, 1972年, 164~166頁。
- 12) 前掲「特高・留置場・軍隊〈上〉」。
- 13) 前掲「特高・留置場・軍隊〈上〉」。
- 14) 「工場立法の必然性 資本論による解明」[渡部徹著作スクラップ帳]。原稿用紙は大阪商科大学のものを使用。履歴からはわからないが、渡部が戦前に同大学と関係があったことが想像できる。
- 15) 「標準労働日ノ制定ヲメグル理論的問題」[渡部徹著作スクラップ帳]。
- 16) 前掲「特高・留置場・軍隊〈上〉」。渡部徹「特高・留置場・軍隊〈下〉 生還を期した一兵卒の苦闘記」『さんいち』11号, 1980年12月, [渡部徹著作スクラップ帳]。
- 17) 渡部徹「哲学ノートⅡ」渡部徹関係資料。
- 18) 同前。
- 19) 同前。
- 20) 同前。
- 21) 同前。
- 22) 渡部徹「日本共産党について」『現代の理論』34号, 1966年11月, [渡部徹著作スクラップ帳]。
- 23) 児玉健次編著『聞こえますか命の叫び 戦没学生永田和生の「軍隊日誌」]かもがわ出版, 2006年。
- 24) その後、吉村は1947年5月に京都帝国大学経済学部大学院に入り、翌年2月に同学部教官となっている（前掲「故吉村達次先生略歴および業績について」）。
- 25) 前掲「日本共産党について」。
- 26) 「生産管理と経営参加」[渡部徹著作スクラップ帳]。
- 27) 小山弘健『戦前日本マルクス主義と軍事科学』エスエル出版会, 1985年, 331頁。
- 28) 前掲「日本共産党について」。
- 29) 渡部徹「科学と文化」『大阪タイムス』39号, 1946年11月26日, [渡部徹著作スクラップ帳]。
- 30) 社会経済労働研究所編『近代日本労働者運動史』白林社, 1947年, 3頁。
- 31) 同前, 1頁。
- 32) 同前, 197頁。
- 33) 内野壮児「書評 「近代日本労働者運動史」『アカハタ』339号, 1948年4月1日, [渡部徹著作スクラップ帳]。
- 34) 松本巖「理論と実践の統一の重要性 社会経済労働研究所批判」『前衛』27号, 1948年5月, [渡部徹著作スクラップ帳]。
- 35) 大木定五郎「書評 渡部<sup>ママ</sup>徹「日本労働組合運動史」」『前衛』104号, 1955年5月, [渡部徹著作スクラップ帳]。
- 36) 「「近代日本労働者運動史」への批判に答う」[渡部徹著作スクラップ帳]。
- 37) 渡部徹「私の運動史研究 日本共産党とのかかわりを中心に」『労働調査時報』710号, 1981年6月。
- 38) 河野健二「人文研の同僚として」偲ぶ会呼びかけ人編『追憶 故渡部徹先生』14, 5頁。河野

- は、「渡部徹先生を偲ぶ会」でもこれとほぼ同じ話をしている。ただし、有志の歓迎会は「京都大学経済学部の人たちのうちの有志、大体マルクス系でしょうか。勉強会とか懇親会を作っております」と述べていること、そして、渡部の啖呵については「私は彼を招いた責任者ですから、ちょっとハラハラした気持ちで聞いてました」と感想を述べている点が異なる（田中真人編『渡部徹先生を偲ぶ』田中真人，1995年，34頁）。
- 39) 田中真人編『渡部徹先生を偲ぶ』田中真人，1995年，34頁。なお、田中は「先日、渡部先生の奥様からうかがったところでは、当時親しかった久野収氏は、「渡部徹が京都帝国大学に行くとは何事である。以後、君とは絶交する」という宣告をされたんだそうです。ちなみに久野収氏は、これも奥様からうかがったんですが、渡部夫妻を引き合わせる媒介役としては少なからぬ役割を果たされたのだそうであります。」(35, 6頁)と付け加えている。
- 40) 「渡部徹「これまでの日本労働運動のはなし」」「渡部徹著作スクラップ帳」。
- 41) 渡部は京大職組人文支部に所属していた。やや時代が下るが、1952年7月時点の人文支部の構成員は65名で桑原武夫、重松俊明、坂田吉雄、河野健二、藤枝晃、島田慶次、渡部徹、鶴見俊輔、天野元之助、今西錦司、吉田光邦、梅溪昇、本山幸彦、多田道太郎、樋口謙一、後藤靖らの名がある（「京都大学職員組人文支部組員名簿（一九五二・七・二二現在）」渡部徹関係資料）。
- 42) 前掲「私の運動史研究」。
- 43) 渡部徹「平和運動と民族解放 その優位性の問題について」『同志社学生新聞』96・97号，1953年6月11・21日，「渡部徹著作スクラップ帳」。
- 44) 渡部徹「必要な階級的統一 基礎となる経済闘争」『立命館学園新聞』649・650号，1954年1月11日，「渡部徹著作スクラップ帳」。
- 45) 「彙報」『東方学報』18号，1950年2月。
- 46) 渡部徹「日本労働組合全国協議会（全協）史資料（一九二九年末まで）」『人文学報』1号，1950年12月，「渡部徹著作スクラップ帳」。
- 47) 「日本労働組合全国協議会の成立事情」『人文学報』2号，1952年3月，「渡部徹著作スクラップ帳」。
- 48) 渡部徹「四・一六事件後の全協の再建過程 極左冒険主義の発現」『大阪経大論集』4号，1952年6月，「渡部徹著作スクラップ帳」。
- 49) 渡部徹「日本労働運動史に関する一考察 社会民主主義と赤色労働組合主義」『大阪経大論集』6号，1953年1月，「渡部徹著作スクラップ帳」。
- 50) 渡部徹「統一戦線戦術と人民戦線戦術」労働問題研究所編『政治経済基礎講座』第一巻 日本革命と世界革命，岩崎書店，1954年，126頁，「渡部徹著作スクラップ帳」。
- 51) 渡部徹「神山茂夫 戦後日本国家の諸問題 青木書店刊 最高水準の戦略論 謙虚な自己批判に無限の示唆」『学園新聞』739・40号，1954年2月15日，「渡部徹著作スクラップ帳」。
- 52) 「[質問書]写」3月30日，渡部徹関係資料。
- 53) 「[上申書]写」4月19日，渡部徹関係資料。
- 54) 「神山茂夫の除名について」『アカハタ』1954年9月24日。
- 55) 前掲『渡部徹先生を偲ぶ』9頁。
- 56) 「[質問書]写」9月29日，渡部徹関係資料。
- 57) 「[9月27日付アカハタ紙の発表についての意見書]写」10月1日，渡部徹関係資料。
- 58) 前掲「私の運動史研究」。

- 59) 前掲「書評 渡辺徹<sup>ママ</sup>「日本労働組合運動史」。
- 60) 同前。
- 61) 「中央機関紙・誌編集委員会宛京大職員細胞渡部徹書簡」1956年2月1日、「渡部徹著作スクラップ帳」。
- 62) 「関西地方委員会経由 京大人文学研究所渡部徹宛前衛編集部書簡」1956年2月10日、「渡部徹著作スクラップ帳」。
- 63) 京都人文学園創立三〇周年記念世話人会編『わが青春 京都人文学園の記録』京都人文学園創立三〇周年記念世話人会，1976年，28頁。1945年10月に設立された京都自由人協会で重松は新村らとともに会員になっている（『彙報』『日本史研究』1号，1946年5月）。
- 64) 「京都人文学園入学案内（夜間部）一九五一年秋期生徒（本科・聴講科）」京都勤労者学園所蔵京都人文学園関係資料67-19。
- 65) 前掲『わが青春』29頁。
- 66) 「京都人文学園入学案内（夜間部）」京都勤労者学園所蔵京都人文学園関係資料67-22。ここには特別講義で井上清の名前もあるので、京大人文研で同僚になる前にその活動は重なっていたことになる。
- 67) 渡部徹「財政援助は不調そしてデマも 人文学園から勤労者学園へ “産みの苦しみ” のりこえて」『京都勤労者学園』136号，1976年6月，「渡部徹著作スクラップ帳」。
- 68) 同前。
- 69) 「講師会議記録」1956年12月，京都勤労者学園所蔵京都人文学園関係資料。本資料は奥村旅人氏の翻刻により本特集の資料篇に収録されている。
- 70) 同前。
- 71) 前掲「財政援助は不調そしてデマも 人文学園から勤労者学園へ “産みの苦しみ” のりこえて」。
- 72) 「同志春日正一宛京都大学職員細胞渡部徹書簡」1956年1月23日，渡部徹関係資料。以下明記しないかぎり同資料から引用。
- 73) 日本共産党中央委員会「若干の同志たちの除名および処置の取消しに関する決定」『アカハタ』1956年5月19日付。
- 74) 「アカハタ 五月一九号掲載 中央委「若干の同志たちの除名および処置の取消しに関する決定」についての意見と質問」渡部徹関係資料。
- 75) 同前。
- 76) 前掲「私の運動史研究」。
- 77) 坂口信一「離党声明書」1959年4月，渡部徹関係資料。以下明記しないかぎり同資料から引用。同資料は「渡部徹著作スクラップ帳」にも貼り付けられており目次に「坂口信三名」と記載がある。
- 78) 京都大学人文科学研究所・林業問題研究会編『林業地帯 奈良県吉野林業地帯と徳島県木頭林業地帯の歴史と現状』高陽書院，1956年，9頁。
- 79) 渡部徹「『林業地帯——奈良県吉野・徳島県木頭の歴史と現状』について」『所報』47号，1956年4月。
- 80) 同前。
- 81) 井上清・渡部徹編『米騒動の研究』第1巻，有斐閣，1959年，3頁。
- 82) 井上清「渡部徹さんを偲ぶ」前掲『渡部徹先生を偲ぶ』。

- 83) 同前。
- 84) 同前。
- 85) 渡部徹編著『京都地方労働運動史』京都地方労働運動史編纂会，1959年，1583頁。
- 86) 同前，9頁。
- 87) 飛鳥井雅道「渡部先生の執念と実証」前掲『追憶 故渡部徹先生』。
- 88) 同前。
- 89) 同前。
- 90) 渡部徹「暗い谷間 戦争と労働運動」大河内一男・向坂逸郎・高島善哉・都留重人・名和統一編『日本の社会主義』社会主義講座7，河出書房，1956年。
- 91) 同前。
- 92) 前掲『渡部徹先生を偲ぶ』8頁。
- 93) 同前。内外文化研究所『文化運動便覧 左翼勢力の影響と実態 1962年版』（武蔵書房，1962年）という官憲資料風の文献には，1961年5月に京都現代史研究会が現代社会思想研究所として出発し，メンバーは宍戸，小山，渡部，和田洋一，高屋定国，辻野功らだったこと，宍戸は三月書房を拠点に大屋史朗らと時事問題研究会を作ったことなどが記されている（30頁）。三月書房を拠点とした彼らの動きが「新左翼」を胚胎させる場となっていたことを示唆している。
- 94) 「広告 近代史研究」『日本史研究』37号，1958年7月。
- 95) 「労働運動史研究の反省 若干の史実についての問題点提起」『近代史研究』3号，1957年12月，「渡部徹著作スクラップ帳」。
- 96) 同前。
- 97) 同前。
- 98) 渡部徹「思い出すま（三）」『大阪社運協月報』66号，1993年5月25日，「渡部徹著作スクラップ帳」。
- 99) 同前。渡部はさらに1960年にも「日本労働運動史分析の方法論 政党論・労働組合論をめぐって」（『社会労働研究』12号）を発表し，方法論を再提起している。
- 100) 前掲「渡部徹さんを偲ぶ」。
- 101) 本稿では，「戦後歴史学」について以下のように考えている（岩城卓二他編『論点・日本史学』ミネルヴァ書房，2022年，の拙稿「労働運動」を微修正）。敗戦前の非科学的とされた「皇国史観」に対して，敗戦後の民主主義に寄与するべく，科学性，客観性，実証研究を重視した歴史学の総称。マルクス主義の影響を受けて，土台となる下部構造（生産関係の総体＝経済的構造）と上部構造（法律的，政治的，宗教的などの社会的意識諸形態）を基に社会を把握する社会構成体論や，変革主体論（1950年代プロレタリア階級に基づく階級闘争史観から60年安保闘争後の「統一戦線」を意識した人民闘争史観へ移行）に依拠して，日本の歴史的「発展」を解明しようとした。

## 要 旨

本稿の目的は、①戦後の日本で労働運動、社会運動の研究を牽引した渡部徹（1918～1995、京都大学人文科学研究所教員）の軌跡とその学問に焦点をあてること、②彼の学問を政治との緊張関係に着目しながら、「戦後歴史学」に位置づけ、その意義を明らかにすることである。扱う時期は、彼が京都帝国大学に入る前後となる1930年代から、『京都地方労働運動史』を編集・刊行する1960年頃までである。渡部が研究活動をおこなった時期は、現代の我々が想像する以上に政治（とくに日本共産党との関係）が学問へ影響を及ぼしていた。このため、本論では、以下の時期区分を設けた。第1章は京都帝国大学在学から敗戦までとし、第2章以降は日本共産党の動向に依って区分した。1950年のコミンフォルム批判までを第2章、コミンフォルム批判から1955年の第6回全国協議会（六全協）までを第3章、六全協から1960年頃までを第4章とし、各時期における党活動に影響を受ける渡部の学問を実証的に描いた。

1930年代から60年頃における渡部の学問の検討から、以下の結論を跡づけた。日本の敗戦直後までは、経済学部出身の渡部の論述スタイルは理論に偏ったものが多かった。しかし、次第に資料の博搜にもとづく、密度の濃い実証的な歴史叙述のスタイルへ変化した。また、叙述の変化だけではなく、共同研究を通して資料の復刻・公開・貸与を積極的に進めていった。ここには、自らが所属する日本共産党という権威との闘い、学知を自らの権威のもとでコントロールしようとする党に対抗した学知の民主化が意図されていたと考えられる。共同研究の一方で、渡部は京都人文科学園での教育や、地域社会運動の歴史編纂に積極的に取り組んでいた。しかも、この学知の民主化は、日本共産党への抵抗にとどまらず、自らの歴史学を刷新していくことにつながっていった。

キーワード：渡部徹、戦後歴史学、京都人文科学園、京都大学、日本共産党

## Abstract

The purpose of this paper is to (1) focus on the trajectory and research of Toru Watanabe (1918–1995, faculty member of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University), who led the study of labor movements, social movements in postwar Japan, (2) place his research in “Postwar Historiography,” focusing on its tension with politics (especially the relationship with the Japanese Communist Party), and clarify its significance.

From an examination of Watanabe’s research from the 1930s to 1960, the following conclusions were drawn. Until immediately after Japan’s defeat in World War II, Watanabe’s style of writing, which was based on his background in economics, was mostly theory oriented. Gradually, however, his style changed to a dense, empirical historical narrative based on his extensive research of materials. In addition to the change in writing style, he actively promoted the reprinting, publication, and lending of materials through joint research. It is thought that his intention was to fight against the authority of the Japanese Communist Party, to which he belonged, and to democratize academic knowledge in response to the party’s attempt to control academic knowledge under its own authority. While conducting joint research, He was also actively involved in teaching at the Kyoto Jinbun Gakuen and in compiling histories of local social movements. Moreover, this democratization of academic knowledge was not limited to resistance to the Japanese Communist Party, but led to a renewal of his own historiography.

**Keywords:** Toru Watanabe, Postwar History, Kyoto Jinbun Gakuen, Kyoto University, Japanese Communist Party